



埼玉県のマスコット コハトン

円空を訪ねて -人と信仰-

江戸時代に、日本各地を巡って造られた「円空仏」、一刀彫りで彫り出されたその姿は、現代においても、とても人気があります。しかし、その作者「円空」については、文献資料が少なく、出自も諸説あるなど、明らかになっていない面がたくさんあります。

今回の展示では、「円空」に関する資料を集め、その魅力に迫ります。謎に包まれたその生涯に、想像を巡らせてみてはいかがでしょうか。

1 円空の生没年

円空が生まれたのは、江戸時代初期の寛永9年(1632)、入定したのは元禄8年(1695)7月15日といわれています。

岐阜県関市の弥勒寺の裏山にある、円空の墓碑銘により、没年は元禄8年7月15日であることがわかっていましたが、生年については、長らく不明のままでした。

昭和45年(1970)、上野国一之宮である抜針神社(貫前神社)に旧蔵されていた『大般若経』に、次のような円空の自筆奥書があることが発見されました。

この写経の断片は、明治維新の際の神仏分離令によって焼却処分されようとした折に、火中より拾い上げられたものだということです。

「十八年中動法輪 諸天昼夜守奉身

刹那転読心般若 上野ノ一ノ宮古今新

いくたひもめくれる法ノ車仁 代蔵モ軽クトブロケ

延宝九年辛酉卯四月丁酉十四日辰時見終也

壬申年生美濃国円空(花押)」



この奥書により、円空がこの写経を転読し終わったのが、延宝9年(1681)であったこと、また、円空が壬申年(寛永9年/1632)の美濃国の生まれであることが明らかになりました。

2 円空の出生地

円空の生誕地については、正確な資料は現在のところ存在しないようです。

次に挙げる文献は、円空の出生地に関する記述のあるもので、円空研究のための代表的な3冊であるといわれています。



『崎人伝』(伴蒿蹊著)

埼玉県立浦和図書館所蔵より

◆『飛州志』(ひしゅうし)

〈釈円空之説〉の項

「姓氏或ハ何國ノ産何レノ宗派ト云フコトヲ不知疑フラクハ是台密ノ徒タルカ」

◆『近世崎人伝』(きんせいきじん でん)

〈僧円空〉の項

「美濃国竹が鼻といふ所の人也。稚きより出家し、其の寺にありしが、廿三にて遁れ出、富士山に籠り、又加賀白山にこもる。」

◆『金鱗九十九之塵』(こんりんつくものちり)

〈帆丸屋の系譜(九十九塵著者)〉の項

「貞享元禄乃頃の人なり。生国は西美濃安八郡中村の住人、加藤与左衛門といへる人の孫なりとぞ。」

『飛州志』では、姓名、出生地は不明である、『近世崎人伝』では、竹が鼻(岐阜県羽島市)の生まれであるとしています。このほかにも、高賀山群の木地師の出身とする岐阜県郡上郡美並村説など、円空の出生地にはいろいろな説があるようですが、美濃国の生まれであったこと以上のことは、わかっていないようです。

『飛州志』

飛驒国の地誌で、編者は第七代飛驒代官長谷川忠崇(はせがわ ただたか)。

徳川吉宗の内命により、編集に着手したといわれている。『飛州志』が編まれたのは、享保14年(1729)から延享2年(1745)の間で、当時飛驒に存在していた古文書や、寺社の重宝など網羅的に収録しており、飛驒史研究の必携書といわれている。

『近世崎人伝』

著者は、京都の歌人・文章家の伴蒿蹊(ばん こうけい)。天明8年の作。

奇人といわれた、たぐいまれな徳行の人びとや儒者、僧侶、歌人、詩人、隠者など、有名・無名を問わず、近世の人物百余名について記した伝記。

円空に関しては、

「あらかじめ人の来るを知る。又人を見、家を見ては、或は久しくたもつべし、或はいくほどもなく衰ふべしといへるに、ひとつもたがふことなし」と、その常人離れた才能についても触れている。

『金鱗九十九之塵』

著者は桑山好之(くわやま よしゆき)。通称、帆丸屋清左衛門。

大八車の製造の傍ら、野史に取り組んだ。

成立は天保の末以後、弘化頃までとされており、名古屋・尾張国に関する江戸時代の編著作を集めた『名古屋叢書』の一編として収められている。



3 円空の信仰

円空は、天台宗に属する台密の僧侶であったといわれています。しかし、岐阜県に伝承として残る「両面宿禰（りょうめんすくな）」をはじめ、各地の民間信仰にみられる信仰仏を造像することもありました。また、『近世畸人伝』に、「稚きより出家し、其の寺にありしが、廿三にて遁れ出、富士山に籠り、又加賀白山にこもる。」と記されているように、白山や伊吹山などで修業した修験僧でもあり、奈良以東から北は北海道まで遊行をしながら造像してまわった遊行僧でもあるなど、様々な顔を持っていたようです。これらにより、円空は一宗一派にこだわらない存在であったと考えられています。



特定の寺院や宗派に属さず、全国を廻国し、修行する僧を遊行僧（ゆぎょうそう）といいますが、円空と並び称される遊行僧に木喰という人物がいます。円空は生涯にわたって12万体の造像を行ったとされていますが、この木喰も、各地に多数の造像仏を残しています。

木喰（もくじき）

円空に遅れること約100年、諸国を遊行し多くの木彫仏を残した。その作品は、温和な表情により「微笑仏」と呼ばれ、親しまれている。

享保3年（1718）甲斐国生まれ。安永2年（1773）2月に56歳で廻国に旅立ち、安永7年には、北海道に渡る。文化7年（1810）、終焉の地を漏らさないように甥に告げ、6月5日死去したといわれている。

4 円空の造像・遊行

円空の造像活動については、岐阜県美並村の根村神明神社に伝わる「天照皇大神坐像」「阿賀田大権現坐像」「八幡大菩薩坐像」の三体が、もっとも早い時期に彫られた像であるといわれています。この三体の神仏像は、同神社に残る棟札に記された記録により寛文3年作、円空32歳の時の造像であることがわかっています。

円空は美並村で、多数の神仏像を造像しましたが、この地をいつ頃あとにしたかについては、わかっていないようです。美並村の子安神社に残る棟札に「寛文4年12月吉祥」と書かれているものがあり、この頃までは滞在したと考えられています。しかし、その後の1年余りの間、円空の足跡を示す資料はみつかりません。

美並村の記録以降、忽然と姿を消した円空は、どのようにして各地を辿ったのでしょうか。寛文6年（1666）、円空は突然、弘前に現れます。弘前市立図書館に所蔵されている『弘前藩庁御国日記』の寛文6年1月29日条に、次のように記されています。

『弘前藩庁御国日記』（ひろさきはんちょうおくににつき）（弘前市立図書館蔵）

「円空と申旅僧壺人長町二罷有候処二御国二指置申間敷由被仰出候二付而、其段申渡候所、今廿六日二罷出、青森へ罷越、松前へ参由」

この史料によって、寛文6年1月頃に、円空が弘前城下にいたことがわかります。また、円空が、藩命によりこの地を追い出され、松前（北海道）を目指して立ち去ったことがわかります。

なぜ、円空が弘前城下を追いだされたのかは定かではありませんが、寛文5年7月、江戸幕府が「諸宗寺院法度」を發布しています。これにより、僧侶の市井での法談を禁じたことから、この禁止事項に触れたのではないかとの説があります。



寺院法度（じいんはつと）

「寺院法度」とは、江戸時代に幕府から寺院に布達された法令の総称をいいます。寺院法度は、それまでは、大寺や宗派ごとに出されていたものですが、寛文5年7月にはじめて、すべての宗派に共通の内容で、将軍家綱による「諸宗寺院法度」九カ条と、老中連署の「下知状」五カ条が出されました。

この法度は、寺院の本末制度や檀家制度、住職の資格等の制定、僧や修験者などが借家をする場合の規程や法談の禁止など、細かく定めたものです。

5 蝦夷地における円空仏の見聞記

弘前城下を追われた円空は、蝦夷地に渡ります。当時の蝦夷地は松前藩にゆだねられており、和人の数はまだまだ少なく、居住区も和入地と蝦夷地に分けられていました。円空の足跡は、道南地方を中心にのこされています。2ヶ月ほどの滞在の中で、多くの円空仏を造像しました。

洞爺湖観音島観音堂に安置されていた観音菩薩坐像（北海道有珠町善光寺保管）の背面には、次の銘があります。

「うすおくのいん小嶋
江州伊吹山平等岩僧内
寛文六年丙午七月廿八日
始山登
円空（花押）」

この像に記されている銘は、円空が滋賀県伊吹山にある修験者の行場、平等岩の修行僧であったことが知られる重要なものです。また、この文中、「始山登」とあるのは、蝦夷の臼岳に登ったことを示しています。

円空の蝦夷地での活動は、各地に存在する円空仏の銘のほかに、江戸時代の冒険家たちの見聞記にも見ることができます。



『松浦武四郎紀行集 下』

(吉田武三編 富山房 1977) より

松浦武四郎（まつうら たけしろう）

幕末の北地探検家。弘化元年（1844）から単身、探検の途につき、東西蝦夷地及び樺太、エトロフ島、クナシリ島を探査した。のち、蝦夷地御用掛に任じられ、道路開墾の調査にあたり、全土を視察した。

有珠や礼文華窟、太田権現窟などにある、円空仏について『東西蝦夷日誌』に記している。



菅江真澄（すがえ ますみ）

江戸中期の国学者・地誌作者。多くの日記、旅行記、地誌、考証、随筆を残している。

寛政年間（1789-1801）には、蝦夷地まで足をのばし、『蝦夷洒布利（えみしのえぶり）』『蝦夷喧辞弁（えみしのさへぎ）』の中で、有珠や礼文華窟でみた円空仏について記している。

6 各地の円空仏

◆荒子観音寺（愛知県名古屋市）

荒子観音寺は円空仏の宝庫として知られています。また、この寺には『円空上人小伝』（『浄海雑記』所収）が伝わっており、円空とは縁の深い寺であったといえます。円空は、たびたびこの寺を訪れ、多くの造像仏を残しました。この寺に残る3mをこす2体の仁王像は、円空最大の作品といわれています。『尾張名所図会 卷之五』の〈愛智郡 荒子観音寺〉の項に、円空に関する記述があります。

「元禄年中僧円空当寺に来寓せし時、数千の仏像を彫刻せり。そもそも円空師は仏像十二万体を刻まんとの誓願ありしよし。」

◆恐山（焼山）（青森県むつ市）

正徳4年（1714）発行の『和漢三才図会 卷六十五』の〈焼山（恐山）〉の項に、円空の東北における足跡に関する記述があります。

「開基慈覚太子、千体石地藏を作る。中尊は長五尺許。其他は小仏なり。而して人取去って、今僅に存す。近頃僧円空なる者有り、千体像を修補す。」

この記述は、円空が没した18年後に書かれたもので、円空に関する文献のうち、もっとも古いものです。これにより、円空が遊行の途中に恐山に立ち寄ったことがうかがえます。

7 埼玉県の円空仏

関東で確認されている円空仏は、埼玉県が圧倒的に多く、次いで栃木県、群馬県の順となっています。埼玉県にも多くの円空仏を残している円空ですが、いつ頃、埼玉県を訪れたのでしょうか。



県内「円空仏」分布図



 は特に多くの「円空仏」がみつかる市町村

円空が訪れた時期を示す銘のある資料は、埼玉県内では、みつかっていません。関東で確認されている銘文のある史料には、次のものがあります。延宝8年(1680)9月の背銘のある、茨城県笠間月崇寺の観音像、群馬県一之宮抜鉾神社(貫前神社)旧蔵の『大般若経』奥書の延宝9年(1681)4月、そして、天和2年(1682)の背銘のある、栃木県鹿沼市広濟寺の千手観音立像。これらの銘文の年代の時期に、埼玉県を含む関東において、活動したと推定されています。

◆身近に出会える円空仏

小川町【普光寺】

本尊「聖観音菩薩立像」(木造)は、円空作の薬師仏で秘仏とされてきましたが、現在は公開されているようです。

春日部市【観音院】

七体の円空仏は、5月3.4.5日の連休には円空仏祭に拝観することができます。

円空略年譜

西暦	年号	年齢	事蹟
1632	寛永9	1	岐阜県(美濃国)に生まれる。(群馬県富岡市貫前神社旧蔵『大般若経』奥書)
1654	承応3	23	この年、某寺を出遁したと伝えられる。(『近世畸人伝』伴蒿蹊著)
1663	寛文3	32	11月6日、岐阜県郡上郡美並村(現郡上市)の神明神社の三体の仏像を作る。(最も初期の円空仏といわれる。)
1666	寛文6	35	1月26日、津軽藩弘前城下を追われ、青森を経て蝦夷地(松前)に渡る。 7月28日、洞爺湖観音島(北海道虻田郡)の観音堂に、「寛文6年」の銘のある観音像を作る。
1671	寛文11	40	7月15日、奈良法隆寺の巡苑春塘から「法相中宗血脈」を受ける。
1676	延宝4	45	名古屋市中川区荒子観音寺にて、仁王像一対を刻む。(『浄海雜記』) 12月25日、「両頭愛染法」を書写し、荒子観音寺に遺す。(『浄海雜記』)
1679	延宝7	48	7月5日、滋賀県大津市園城寺の尊栄から「仏性常住金剛宝戒相承血脈」を受ける。
1681	延宝9 天和1	50	4月14日、群馬県富岡市(旧上野国一之宮)貫前神社にて、『大般若経』の奥書に墨書きを残す。
1682	天和2	51	9月9日、栃木県日光市の円観坊で十一面千手観音像を作る。
1684	貞享1	53	名古屋市中川区荒子観音寺住職円盛法印から「天台円頓菩薩戒師資相承血脈」を受ける。
1689	元禄2	58	8月9日、滋賀県大津市園城寺の尊栄大僧正から「授決集最秘師資相承血脈」を受ける。また、再興した自坊の岐阜県関市の弥勒寺が天台宗門派総本山園城寺内靈鷲院兼日光院の末寺となる。
1690	元禄3	59	9月26日、岐阜県上宝村(現高山市)で三体の仏像を作る。その中の今上皇帝像の背面に、飛驒の国で一万体、全国で十万体の仏像を作り終えた、と記す。
1692	元禄5	61	4月11日、岐阜県洞戸村(現関市)の高賀神社の懸仏台盤に、降雨を祈り大般若経を真読誦し、その願いを叶える、と記す。
1695	元禄8	64	7月13日、弟子の円長に「授決集最秘師資相承血脈」を与える。 7月15日、岐阜県関市の弥勒寺で入寂。弥勒寺の裏山に「当寺中興円空上人 元禄八乙亥天7月15日」と刻まれた墓石が立つ。

血脈

上記円空の年譜の中に、「血脈」という名称がいくつか出てきます。「血脈」とは、仏の教えや戒律、宗派ごとに師から伝承された教説や実践行が、弟子へ継承されたことを示す系譜や、師から弟子に伝授した証として、弟子に与える書面のことをいいます。これを、人間の血管に喩えた語です。



より詳しく知りたい方へ

～県立図書館にある今回の展示資料～

※『書名』 著者名 発行者 出版年 所蔵館【県立図書館の請求記号】 帯出区分
※以下に掲載した資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで11月21日（水）まで展示中です。

◆円空の生没年

- 『甘楽富岡史帖 みやま文庫 124』（今井幹夫著 みやま文庫 1992）【213.3/カ】
『円空の謎を解く 円空没後三百年 愛知県郷土資料刊行会』
（加藤元人著 中日出版本社 1994）【188.8/エ】
『円空の彫刻』（土屋常義著 造形社 1961）【4718/ツ】

◆円空の出生地

- 『飛州志 飛驒資料』（長谷川忠崇著 岐阜新聞社 2001）【291.53/ヒシ】
『大日本地誌大系 30 斐太後風土記』（雄山閣 1972）【291.53/ヒ】
『カラー飛驒路 山溪カラーガイド』
（長倉三朗文 与呉日出夫写真 山と溪谷社 1974）【291.53/ヨ】
『近世畸人伝 東洋文庫 202』（伴蒿蹊著 三熊花顛著 平凡社 1984）【281.04/ハ】
『近世畸人伝 伴蒿蹊・撰アウトサイダー119人』（村上護著 教育社 1981）【281/キ】
『大日本仏教全書 104 続日本高僧伝』（仏書刊行会編纂 名著普及会 1979）【180.8/ク】
『畸人伝 5冊 2』
（伴蒿蹊校 三熊花顛画 河内屋茂兵衛 [文政年間]）【W281/B17】※浦和所蔵
『名古屋叢書 校訂復刻 7 地理編』
（名古屋市教育委員会編 愛知県郷土資料刊行会 1982）【081.2/コ/7】
『百家説林 続編 中』（吉川弘文館 1906）【049/ヒ/】
雑誌 長谷川公茂著「円空と美濃」（『月刊歴史手帖 99号』名著出版 1982.1）



◆円空の信仰

- 『円空と木喰 作仏・遊行廻国・その生きざま』
（牧野和春著 池田勇次著 惜水社 2000）【188.82/エ】
『円空と木喰』（五来重著 淡交社 1997）【188.82/エ】
『作仏聖—円空と木喰 宗教民俗集成 2』（五来重著 角川書店 1995）【188.8/サ】
『修験僧円空 研究成果と課題』（池田勇次著 惜水社 2007）【188.82/シ】
『名僧たちの教え 日本仏教の世界 朝日選書 784』
（山折哲雄編著 末木文美士編著 朝日新聞社 2005）【182.1/チ】

- 『日本の美術 35 円空と木喰 ブック・オブ・ブックス』(小学館 1974)【BM708】
 『日本の名僧 99 の謎』(中尾堯著 産報ジャーナル 1978)【BM180】
 『乞食円空』(飯沢匡著 筑摩書房 1973)【BM910/コ】
 『匠の旅人 円空思想論』(丹羽一彦著 風琳堂 1991)【188.8/ニ】
 『山伏 入峰・修行・呪法 中公新書 48』(和歌森太郎著 中央公論社 1964)【188.5/ワ】
 『修験道史研究 東洋文庫 211』(和歌森太郎著 平凡社 1984)【188.5/ワ】
 『山の宗教 修験道講義 角川選書 223』(五来重著 角川書店 1991)【188.5/ヤ】
 雑誌 梅原猛著「円空について」(『図書 659号』(岩波書店 2004.3)
 雑誌「円空 十万体の木像を残した苦行僧(特集「旅に生きる」漂泊人の系譜)」
 (『歴史読本 51-10』新人物往来社 2006.7)
 雑誌 三野恵著「円空 十二万体の木造を彫った漂泊僧(特集 日本の信仰人宗教者100人)」
 (『歴史読本 55-2』新人物往来社 2010.2)
 雑誌 祖田浩一著「円空 仏像に匿された秘密(特集 日本史 謎の人物)」
 (『歴史と人物 167号』中央公論社 1984.11)
 雑誌「円空 放浪の仏師」(『別冊太陽 1974年9月』平凡社 1974.9)
 雑誌「円空 遊行と造仏の生涯」(『別冊太陽 1984年8月』平凡社 1984.4)
 雑誌「円空という“謎”」(『別冊太陽 2005年4月』平凡社 2005.4)
 雑誌「円空のふるさと」(『自然と文化 57』日本ナショナルトラスト 1998.3)

◆木喰

- 『木喰 微笑仏に誘われて』(木喰スマイル会著 鈿脈社 1996)【186.8/ヱ】
 『木喰 その蝦夷地の足跡』(小寺平吉著 学芸書林 1981)【188.5/ヱ】
 雑誌「木喰の微笑仏」(『別冊太陽 1983年8月』平凡社 1983.8)

◆円空の造像・遊行

- 『江戸の漂泊聖たち』(西海賢二著 吉川弘文館 2007)【182.88/ヱト】
 『異端の放浪者たち 宗教民俗集成 3』(五来重著 角川書店 1995)【163/イ】
 『遍歴放浪の世界 NHK ブックス 58』(紀野一義著 日本放送出版協会 1983)【180.4/ハ】
 『図説日本仏教の世界 7 聖と救済』(集英社 1989)【182.1/ズ】
 『仏教民俗学大系 2 聖と民衆』(名著出版 1986)【182.1/ツ】
 『円空研究 別巻 2 総集編』(円空学会編 人間の科学社 1979)【188.8/E62】
 『弘前藩 シリーズ藩物語』(本田伸著 現代書館 2008)【212.1/ヒロ】
 『飛騨歴史散歩 下下の国の誇り高き系譜』(加藤慧著 創元社 1977)【215.3/カ】
 『飛騨 よみがえる山国の歴史 飛騨国府シンポジウム』
 (森浩一編 八賀晋編 大巧社 1997)【215.3/ヒカ】
 雑誌 青山玄著「円空造仏の動機について」
 (『日本研究 2』角川書店 1990.3)
 雑誌 三野恵著「放浪の造仏聖・円空」(『大法輪 74-2』大法輪閣 2007.12)



◆江戸の宗教

- 『江戸幕府の宗教統制 日本人の行動と思想 16』(圭室文雄著 評論社 1980)【180.2/㍉】
『日本仏教史 8 近世篇之二』(辻善之助著 岩波書店 1953)【180.2/㍉】
雑誌 林淳著「寛文五年諸宗寺院法度と勧進の宗教者」
(『禅研究所紀要 38』愛知学院大学禅研究所 2009)

◆蝦夷地における円空仏の見聞記

- 『松浦武四郎紀行集 下』(吉田武三編 富山房 1977)【291.09/㍉】
『菅江真澄全集 2 日記』(菅江真澄著 内田武志編集 未来社 1971)【081.5/㍉】
『北夷談 樺太探検・北方経営の先駆者松田伝十郎の蝦夷地見聞録』
(松田伝十郎著 中俣満編訳 新潟日報事業社 2008)【291.1/㍉】
『北海道の宗教と信仰』(佐々木馨著 山川出版社 2009)【162.11/㍉】
『北海道意外史 上 ふるさとシリーズ 9』(須藤隆仙著 みやま書房 1979)【211/㍉】
『円空 その蝦夷地の足跡』(小寺平吉著 学芸書林 1979)【188.8/㍉】
『弁財船往還記 北海道・岩内を拓いた人びと』(森梢伍著 日本経済評論社 1983)【211.7/㍉】
『北方未公開古文書集成 1 蝦夷志』(寺沢一〔ほか〕責任編集 叢文社 1979)【211/㍉】

◆各地の円空仏

- (荒子観音寺)
『日本名所風俗図会 6 東海の巻』(角川書店 1984)【D291.08/㍉】
『江戸時代図誌 11 中山道』(赤井達郎〔ほか〕編集 筑摩書房 1976)【210.5/㍉】
『仏像物語 仏はどこに、どんな姿で。NHK「祈りの造形」』
(西村公朝〔著〕学習研究社 1988)【BM718】
『愛知県の歴史散歩 上 尾張 歴史散歩 23』
(愛知県高等学校郷土史研究会編 山川出版社 2005)【291.55/㍉】
雑誌 小島梯次著「荒子観音の円空仏」(『愛知県史研究 13号』愛知県 2009.3)
雑誌 小島梯次著「扶桑町・正覚寺及び江南市・音楽寺の円空作十二神将」
(『愛知県史研究 15号』愛知県 2011.3)

- (恐山)
『倭漢三才図会 卷之22』(寺島良安編 内藤書屋 1890)【R031/Te47】
『和漢三才図会 9 東洋文庫 481』
(寺島良安〔著〕島田勇雄〔ほか〕訳注 平凡社 1988)【031.2/㍉】
雑誌 安藤真著「一遠野津恐山を行く一円空仏の波一三厩から宇鉄へ」
(『自由 369』自由社 1990.11)

- (その他の地域)
『円空への旅』(早坂暁著 NHKドラマ制作班著 日本放送出版協会 1988)【188.8/㍉】
雑誌 「古仏巡礼の旅1「円空仏」に会いに飛騨を旅する」
(『サライ 20(17)』小学館 2008.9.4)
雑誌 中川光熹著「日光山と円空」(『山岳修験 39号』日本山岳修験学会 2007.3)
雑誌 岡部央著「高崎市延養寺の円空仏「天神像」について」
(『群馬県立歴史博物館紀要 18』群馬県立歴史博物館 1997)

◆埼玉の円空仏

- 『円空ころを刻む 埼玉の諸像を中心に 特別展』
(埼玉県立歴史と民俗の博物館編 埼玉県立歴史と民俗の博物館 2011)【S718/エ】
- 『「さいたまの円空」展示図録 特別展』(埼玉県立博物館 1988)【S718/サ】
- 『円空 激情に秘めた祈り 図録』(大宮市立博物館編 大宮市立博物館 1985)【S718/エ】
- 『粕壁と円空 展示図録 開館記念特別展』(春日部市郷土資料館 1990)【S718/カ】
- 『粕壁と円空再び… 春日部市市制施行 50 周年記念・夏季展示替 (第 29 回)』
(春日部市郷土資料館編集 春日部市郷土資料館 2004)【S718/カ】
- 『新指定文化財調査報告 さいたま市文化財調査報告書 6』
(さいたま市教育委員会 2005)【S709.11/シ】
- 『みやしろの円空仏 平成 6 年度特別展』
(宮代町郷土資料館編 宮代町郷土資料館 [1994])【S718/ミ】



- 『さいたま寺社めぐり 夫婦で訪ねた四季の寺社 76 選』
(花井泰子文 花井敬写真 幹書房 1999)【BM185】
- 『訪ねてみたい埼玉のお寺』
(インデックス編集部編著 インデックス 2006)【BM185/ヌ】

※今回展示はしていませんが、『Lib Letter 29号』を作成する上で、以下の資料も参考としました。

- 『国史大辞典』(国史大辞典編集委員会編 吉川弘文館)【R210.03/コ】
- 『国書人名辞典』(市古貞次〔ほか〕編 岩波書店 1993-1999)【R281.03/コク】
- 『日本人名大事典』(平凡社 1986)【R281.03/ニ】
- 『円空巡礼 とんぼの本』(後藤英夫〔ほか〕著 新潮社 1986)【718.3/エ/】※久喜所蔵
- 『円空風土記』(丸山尚一著 読売新聞社 1974)【718.3/エ/】※久喜所蔵
- 『円空展 入定三百年記念』
(岐阜県博物館、名古屋城管理事務所編 名古屋城管理事務所 1995)※久喜所蔵
- 『円空 千光寺』(小竹隆夫著 造形社 1973)【713/エ/】※久喜所蔵

※刊行後 2 年を経過した雑誌は貸出しができません。2012 年現在、2009 年以前の雑誌は貸出不可です。

※大正期以前に刊行された図書は貸出しができません。

上記以外にも、県立図書館では円空に関する資料を所蔵しております。お探しの資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。

